小湊（こみなと）フワガネク遺跡

【所　在　地】奄美市名瀬大字小湊字外金久
【種　　別】国指定史跡
【指定年月日】平成２２年８月５日

遺跡航空写真（砂丘の陸側約３分の１が指定範囲）

小湊フワガネク遺跡は，奄美大島中部の太平洋岸，弓状の砂丘上標高９ｍに立地する，６世紀から８世紀代に属する貝製品の生産を行った集落遺跡である。遺跡の中央部では，床面に炉を有した掘立柱建物跡４棟が，遺跡の北端部では墓１基が確認され，食用にされたと考えられる各種貝殻や獣骨や魚骨なども多数出土し，当該期における生活の様子が明らかになった。

また，ヤコウガイ製貝匙（かいさじ），イモガイ製貝符（かいふ）といった貝製品が，大量の未製品と貝殻破片，そして，敲石（たたきいし）や磨石（すりいし）とも共伴して出土したことから，ここが貝製品の製作場所であり，製作工程も明らかになった。

このように，小湊フワガネク遺跡は，６世紀から８世紀代における奄美地域の生活の復元を可能にするとともに，ヤコウガイの貝製品の生産を行ったことを明らかにしたという点で極めて重要である。また，当該期の本州から九州にかけては古墳時代から古代へ移行する時期であるが，そうした政治的影響のほとんど及ばなかった地域の社会を解明する上でも重要である。